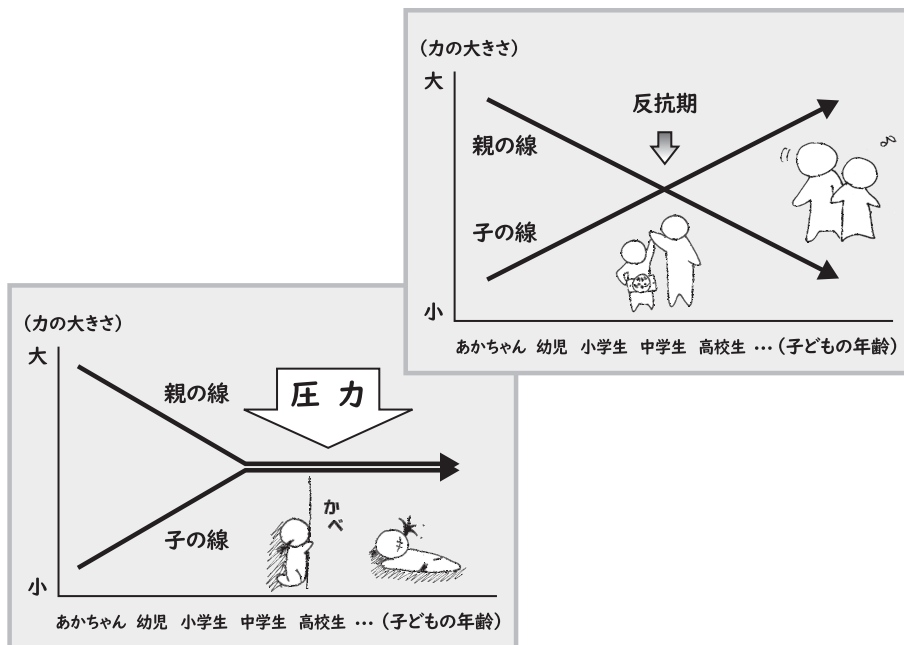


1 親と子が幸せになる 「XとYの法則」

子どもが安心感を得て健やかに成長する、子育ての法則があります。それは図に表すと「X」の形になる「Xの法則」です。そして、親と子の幸せが遠くなる法則も…。それが「Yの法則」です。保護者会や学級だよりなどの話材として最適です。

田村 節子



子どもが安心感を得て健やかに成長するために ◻◻◻◻◻◻◻◻◻◻

社会は急速な科学的発展を遂げ、バーチャルな世界にあふれています。そして、私たちは便利さと引き換えに、人と人との直接的なふれあいを失いつつあります。子どもには動物的な温かいふれあいが必要ですが、効率を求めるあまりに多くのことが機械化され、ふれあいはどんどん失われています。このような時代だからこそ、子どもが安心感を得られるようなかかわりが、われわれ大人に求められています。安心感を与えるものではなく、子どもが実感するものです。そこに難しさがあります。

今回ご紹介する「XとYの法則」は、子どもが安心感を得て健やかに成長するために必要な法則です。親子関係が複雑になる思春期に焦点を当てたこの法則は、NHKのEテレでも紹介されたもので、親だけではなく、子どもとかかわる方すべてに知っていただきたい法則です。

それでは、幸せになる「Xの法則」から説明します。

親と子が幸せになる「Xの法則」 ◻◻◻◻◻◻◻◻◻◻

図1をご覧ください。縦軸は力の大きさです。横軸は子どもの年齢です。「親の線」は、一番力をたくさん使う縦軸の上のほうから始まります。子どもの成長にともなって親が子どもに使う力は少しずつ減っていくので、「親の線」は右下がりになります。

それとは反対に、「子の線」は、最初はおかちゃんですから一番小さいところから始まります(図2)。しかし、だんだん成長して自分でできる力が大きくなり、「子の線」は右上がりになっていきます。

すると、「親の線」と「子の線」が交わる場所が出てきます(図3)。これがいわゆる反抗期です。子育ての目標である自立(「自分で考えて、自分で

図1 親が子どものために使う力

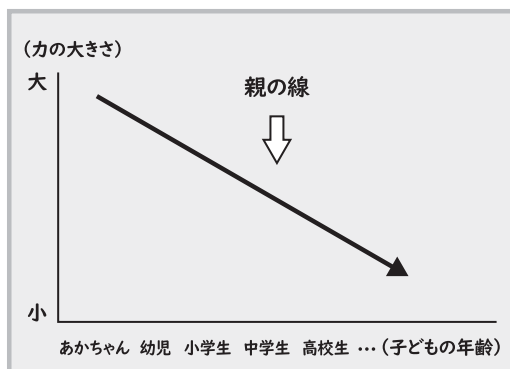


図2 子どもが自分のために使う力

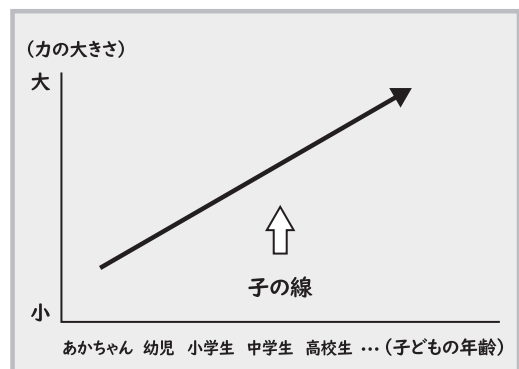
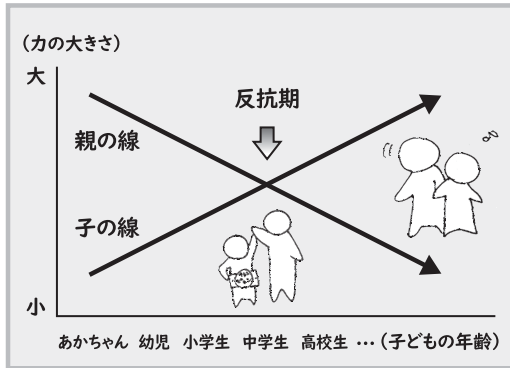


図3 親と子が幸せになる「Xの法則」



行動し、自分で責任をとる)ができるようになってきた証拠です。

この時期には思春期語がよく見られるようになります。思春期語とは、「うるさい」「別に」「まあまあ」「クソババァ」などの親を遠ざけるような言葉です。これらは翻訳すると、「お父さん、お母さん。自分が考えたように行動させてください。困ったら『助けて』と言いますから、それまで好きなようにやらせてください」という子どもの意見表明です。

つまり、親離れ、子離れの時期が来たことを知らせるサインでもあります。この時期を過ぎると「親の線」と「子の線」は離れていき、文字通り子離れ、親離れが進んでいきます。このように、反抗期は子離れ、親離れのために必要なステップだと言えます。

それでは次に、幸せが遠くなる「Yの法則」についてご説明します。

親と子の幸せが遠くなる「Yの法則」

図4をご覧ください。子どもに注ぐ親の力の線は、子どもが成長するにつれ「Xの法則」では下がっていきませんが、「Yの法則」では下がっていきません。したがって、子どもの線も「X」のように親を抜いていくことができません(図5)。つまり、知らず知らずに親が子どもにいつも圧力をかけてコントロールしている形になっています(図6)。圧力の中身は、過保護や過干渉、期待のしすぎや厳しすぎです。

過保護とは、親が子どもの手となり足となって、子どもの代わりに何でもやってあげてしまうことです。時間割を揃えたり、宿題なども親がすべてやってしまったりします。すると子どもは自ら行動しようとせず、受け身にな

図4 「Yの法則」で親が子どものために使う力

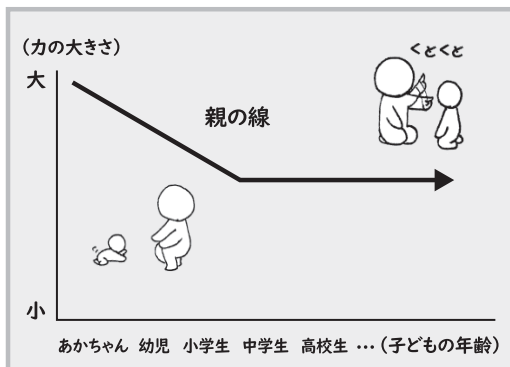


図5 「Yの法則」で親の力を抜けない子どもの力

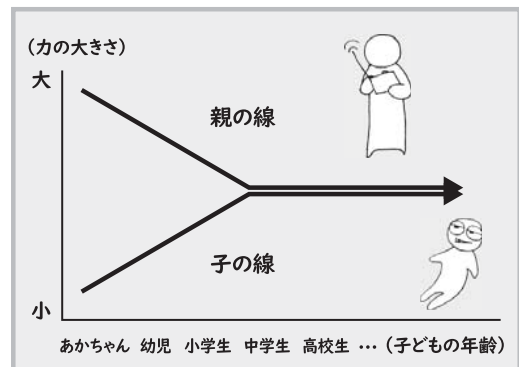
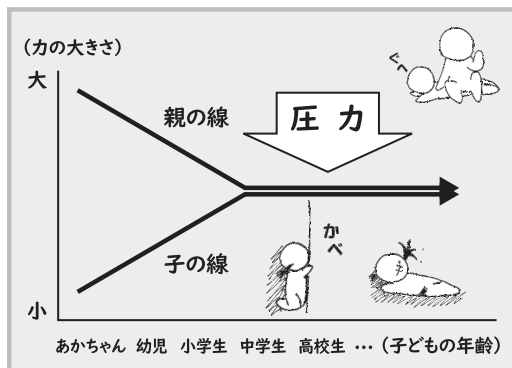


図6 親と子の幸せが遠くなる「Yの法則」



りがちです。

過干渉とは、親が子どもの頭となって、子どもの代わりに何でも考えてあげてしまうことです。「こうしたら」「ああしたら」と、指示が多くなりがちです。知らず知らずのうちに、親が子どもに自分の願いを押しつけたり、転ばぬ先の杖をついたり、先回りしたり、親が子どもの人生のレールを敷いてしまったりすることなどが当てはまります。すると子どもは親の顔色をうかがってばかりいたり、意欲に乏しくなったり、新しい環境を怖がったりしてしまいがちです。

子どもには保護も干渉も期待も厳しさも必要ですが、Yの状態はいずれもそれらが過ぎてしまっています。

子どもには保護も干渉も期待も厳しさも必要ですが、Yの状態はいずれもそれらが過ぎてしまっています。

過保護や過干渉などは、どちらも子どもがかわいいからこそ、親がついてしまいがちなことです。しかし、子どもは親の意向を気にするあまり、子育ての目標である自立ができにくくなってしまいます。

でも、安心してください。子育ては気がついたときに軌道修正できます。

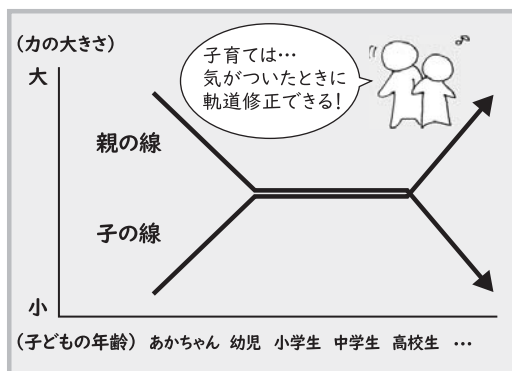
いつだって子育ては軌道修正できる！

では、Yの状態に気がついたら、どうしたらいいのでしょうか。

図7を見てください。これは、軌道修正のグラフです。軌道修正のイメージは、Yの状態になってしまった「親の線」の後ろが、Xの状態と同じように右下がりになり、「子の線」が右上がりになることです。つまり、これまで親が知らず知らずに子どもへかけていた圧力が小さくなり、子どもが自分の力を発揮しやすくなることを意味します。

この過程で、これまで従順だった子どもが親に口ごたえするようになったりすることがよくあります。これが自立の兆しです。子どもは親の言うことをきくのが当たり前だと思っていると、親には不快な感情がこみ上げてくるかもしれません。それでも、「子どもの人生は子どものもの。親が代わりに歩むことはできない」と腹をくくることができると、この感情をうまく乗り越えられると思います。腹をくくれるかどうか、軌道修正できるかどうかの分岐点となります。

図7 「Yの法則」の軌道修正



分岐点をうまく通過するには、いい意味で

分岐点をうまく通過するには、いい意味で